

### ちょっとひといき



先日、名古屋港水族館へ行ってきました。そこで心に残ったのはピワアンコウの標本です。解説によると、オスはメスに寄生して一生を終えるそうです。寄生すると生殖器以外

は退化し、血管はメスとつながり栄養をもらいます。深海は仲間に会うことすらむずかしい環境なので、出会った異性と確実に子孫を残すための方法なのでしょう。

生物の世界の男女の関係はとてバラエティーに富んでいます。タツノオトシゴの仲間ではメスがオスの育児嚢に卵を産み付け、卵がふ化するまで、オスが保護します。昆虫の仲間にはオスなしで子孫を増やす種類もあります。それぞれが生活する環境の中でより確実に子孫を残す方法を発展させてきた結果なのでしょう。生き物たちの様々な繁殖戦略をみてみると、そのたくましさやしたたかさに感心させられます。

そうはいつても、なんとなくオスの立場が弱いなぁと感じるのは気のせいでしょうか。オスの一人としてはすこし複雑な気分です。



ミュージアムパートナーズクラブには、熊本県に居住または勤務されている熊本の自然や文化に興味がある方、博物館活動に興味がある方ならどなたでも参加できます。

熊本の自然や文化に関するさまざまな活動に気軽に参加してみませんか！

1 活動 みなさんの身の回りの地域の自然や文化について、簡単なアンケートを実施します。また、松橋収蔵庫（宇城市松橋町豊福）などで行う様々な活動にも、ぜひご参加ください。

ミュージアムパートナーとして参加される皆さまには、熊本の自然や文化についての情報や、博物館活動の情報をお知らせします。

2 募集 年間を通して、募集しておりますので、詳しい申込方法等は、下記連絡先までお問い合わせください。

〒862-8570 熊本市水前寺6丁目18-1  
熊本県 地域振興部 文化企画課 博物館プロジェクト班  
TEL 096-333-2155 FAX 096-381-9829



熊本県地域振興部文化企画課  
**松橋収蔵庫**  
TEL 0964-34-3301  
FAX 0964-34-3302

定期購読出来ます

〒869-0524  
熊本県宇城市松橋町豊福1695  
TEL 0964-34-3301  
FAX 0964-34-3302

最新号をメールでお届けいたします。ご希望の方はお名前を記入のうえ、松橋収蔵庫宛にメールをお送りください。(パソコンのみ)

shuuzouko\_kumamoto@yahoo.co.jp

「熊本の自然と文化 松橋収蔵庫だより」は熊本県ホームページからもご覧いただけます。

編集・発行  
熊本県地域振興部文化企画課  
熊本市水前寺6-18-1  
096-333-2155  
2008年12月14日

# 熊本の自然と文化

松橋収蔵庫だより

No.6  
VOL.2-3

収蔵庫だよりも今回で6号目の発行となります。今回は31品目からの収蔵品の紹介です。

### 収蔵庫収蔵品紹介31

民俗

### こもあ だい 菰編み台

これは全国的には菰編み台などと呼ばれる俵や菰を編む道具です。県内ではコモガキと呼ばれることが多いようですが、ほかにもタワラアミ、フゴアミキ、ダツアミ、コイドリアミなどとも呼ばれます。縦糸となる細縄を槌の子などと呼ばれる鼓型のおもりに巻いて横木に掛け、横糸となるわらなどをあて、これを縦糸の細縄でからめて編みまします。横木には編み糸の間隔を決める浅い溝の目盛りが刻んであり、この目盛りを使い分けることで菰、米俵、炭俵、フゴ、箕の子など様々なものを編むことができます。作業する人の座高に合わせて手作りされていました。

写真の菰編み台は、昭和初期から中期まで熊本市で使われていたもので、コモガキと呼ばれていました。これは主に米俵を編むのに使われていました。後ろに縄のゆるみを止める鉄製のバネが用いられていますが、昭和初期から中期には、編み目が二重になった複式俵作り専用のものなども造られていました。

昔の農家では冬から春にかけて、夜なべといって夕食の後で夜遅くまで仕事をする習慣があり、俵編みも夜なべの一つでした。



収蔵庫収蔵品紹介 32

植物

ヤツシロソウ

*Campanula glomerata* L. var. *dahurica* Fisch.



ヤツシロソウはキキョウ科の多年草で高さは1 m ほどにもなります。赤みがかった紫色の花弁はろうと型をしており、先は5つにわかれています。茎の先端や葉の脇に数個から10個ほどの花が集まって咲きます。

ヤツシロソウは日本では阿蘇から久住にかけての草原だけに生育しています。ヤツシロソウの名は熊本県の八代地方に由来しているといわれていますが、八代地方には生育していません。どのような経緯でヤツシロソウの名が付いたのか定かではありません。生育地である草原は造林や野焼きが行えないなどの理由で減少しており、それに伴ってヤツシロソウも減少しています。「熊本県の保護上重要な野生生物リスト」(2004年)では絶滅危惧IB類に選定されています。



写真の標本は、大正6(1917)年に現在の阿蘇市波野で上妻博之氏によって採集されたものです。上妻氏は熊本県出身の植物および郷土史研究家で、熊本の代表的な植物研究団体である熊本記念植物採集会を創設しました。熊本県の自然科学および人文科学の発展において大きな役割を果たした人物の一人です。

写真の標本は、大正6(1917)年に現在の阿蘇市波野で上妻博之氏によって採集されたものです。上妻氏は熊本県出身の植物および郷土史研究家で、熊本の代表的な植物研究団体である熊本記念植物採集会を創設しました。熊本県の自然科学および人文科学の発展において大きな役割を果たした人物の一人です。

収蔵庫収蔵品紹介 33

動物

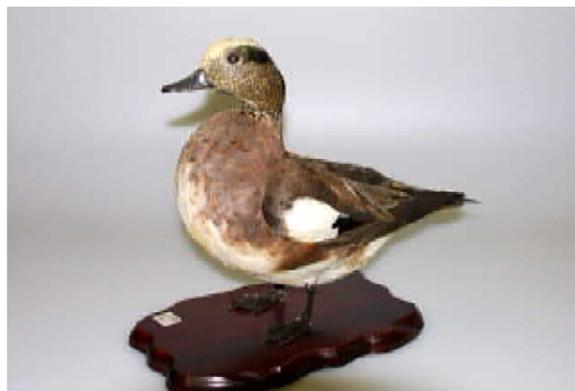
アメリカヒドリ

*American Wigeon* (カモ目カモ科)

日本で見られるアメリカヒドリはシベリア東部から渡来すると考えられている冬鳥で、近縁種であるヒドリガモの群れに混じって生活していることが多いようです。熊本市の江津湖には希に渡来しますが、写真の個体は、1999年2月に上江津湖で死んでいるところを発見されたものです。

本種の雄は、頭部の模様が特徴的です。目のまわりから後方にかけては金属光沢のある美しい緑色で、額から頭頂にかけては淡いクリーム色をしています。しかし、雌は他のカモ類の雌と同様、全体的に褐色で野外での識別は困難です。

松橋収蔵庫が所蔵している本剥製は、アメリカヒドリとヒドリガモの特徴を併せ持っているようにみえます。つまり、胸から脇にかけての褐色が濃いことはヒドリガモで、背面の褐色が濃いことと頭部に緑色の部分があることはアメリカヒドリの特徴でもあります。しかし、頭部の緑色の幅が狭く、本個体が完全なアメリカヒドリであるとまでは言い切れない不確定な要素をもっており、カモ類でしばしばみられる雑種の可能性もあります。



アメリカヒドリ (熊本市上江津湖)

養老孟司先生講演会



満員の会場の様子

11月7日(金)午後2時30分より、くまもと県民交流会館パレアにて、東京大学名誉教授で解剖学者の養老孟司先生の講演会を開催いたしました。



講演中の養老先生

講演会では、数多くの著書をお持ちの先生だけに、独自の視点から自然と文化について、ユニークなエピソードを交えながらお話いただきました。当日は、幅広い年齢層の方々に会場は満員となり、熱心にメモをとりながら、先生のお話に耳を傾ける方も多く盛会でした。これからも講演会などを通して、熊本の自然と文化に対する県民の皆様の関心を高められるような活動を行ってまいりますので、積極的なご参加をお待ちしています。

松高小移動体験教室



11月9日(日)八代市立松高小学校にて、移動体験教室を行いました。6年生の子どもたち約130名が3つのテーマに分かれて活動しました。家庭科室では、縄文時代の人々の食生活を想像しながらのどんぐりクッキー作り。理科室では、葉脈を取り出してのしおり作り。テラスでは、石膏でかたどった化石レプリカ作り。当日は、授業参観日でもあり、保護者の皆さんも子どもたちと一緒にそれぞれの活動に参加していただきました。県文化企画課では、本年度もこうした移動体験教室を小学校の学級・学年PTA活動や、地域の子供会活動、公民館活動など県内各地で実施してきました。このような移動体験教室をご検討の際は、県文化企画課までお気軽にご相談ください。



葉脈標本づくり



どんぐりクッキーづくり



化石レプリカづくり

### ちょっとひといき



寒い冬が終わり、暖かな春がやってきました。春眠暁を覚えず、このぼかぼか陽気についウトウトしてしまう人も多いことでしょう(もちろん私も例外ではなく...)。家で惰眠をむさぼるのもよいです

が、せっかくなので天気の良い日には外に出かけてみましょう。

春といえば桜の季節ですね。松橋収蔵庫の敷地内にはたくさんの桜の木が植わっており、春になるとそれはもう見事なものです。お昼頃にはお弁当やカメラ片手にお花見にいらっしゃる方もいます。どうやらここは花見の穴場スポットになっているようです。そんな満開の桜の木に集まってくるのはなにも人だけではありません。その甘い蜜をもとめ、小鳥や虫たちが花から花へと忙しそうに飛び回っています。「花より団子」といいますが、花を愛でるのは人ぐらいでしょう。

収蔵庫の敷地内には、桜のほかにもツツジやサザンカ、梅などが植わっており、四季折々の花が楽しめます。散歩がてらに立ち寄ってみてはいかがでしょうか。



**ミュージアムパートナーズクラブには、熊本県に居住または勤務されている熊本の自然や文化に興味がある方、博物館活動に興味がある方ならどなたでも参加できます。熊本の自然や文化に関するさまざまな活動に気軽に参加してみませんか！**

- 1 活動 みなさんの身の回りの地域の自然や文化について、簡単なアンケートを実施します。また、松橋収蔵庫(宇城市松橋町豊福)などで行う様々な活動にも、ぜひご参加ください。ミュージアムパートナーとして参加される皆さまには、熊本の自然や文化についての情報や、博物館活動の情報をお知らせします。
- 2 募集 年間を通して、募集しておりますので、詳しい申込方法等は、下記連絡先までお問い合わせください。

〒862-8570 熊本市水前寺6丁目18-1  
熊本県 地域振興部 文化企画課 博物館プロジェクト班  
TEL 096-333-2155 FAX 096-381-9829



〒869-0524  
熊本県宇城市松橋町豊福1695  
TEL 0964-34-3301  
FAX 0964-34-3302

◆定期購読出来ます◆

最新号をメールでお届けいたします。ご希望の方はお名前を記入のうえ、松橋収蔵庫宛にメールをお送りください。(パソコンのみ)  
bunkakikaku@pref.kumamoto.lg.jp

「熊本の自然と文化 松橋収蔵庫だより」は熊本県ホームページからもご覧いただけます。

編集・発行  
熊本県地域振興部文化企画課  
熊本市水前寺6-18-1  
096-333-2155  
2009年3月15日

# 熊本の自然と文化

松橋収蔵庫だより

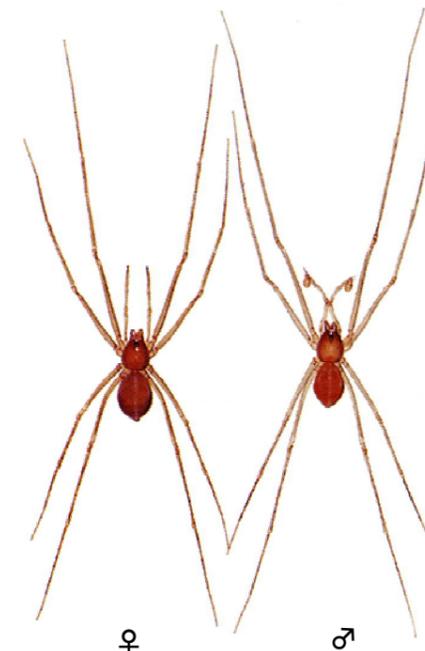
No.7  
VOL. 2-4

◇収蔵庫だよりも今回で7号目の発行となります。今回は38品目からの収蔵品の紹介です。

### 収蔵庫収蔵品紹介 38

動物

イリエマシラグモ *Falcileptoneta iriei* (Komatsu, 1967) マシラグモ科



♀

♂

イリエマシラグモ

(1992年11月23日 上益城郡美里町)

熊本県内には約110の洞窟が分布しており、ここではマシラグモ科、ホラヒメグモ科、タナグモ科(ナミハグモ類)などのクモ類が生息しています。今回紹介するイリエマシラグモは体長が2ミリほどの小さなクモで、県内の洞窟に広く分布しています。

和名のあたまにつく「イリエ」はこのクモの発見者である入江照雄氏(熊本市在住)に由来します。名前の横に書かれている「*Falcileptoneta iriei* (Komatsu, 1967)」はイリエマシラグモの学名で、ここにもイリエ(irie)と表記されています。学名とは、ひとつひとつの種につけられる生物学における世界共通の名前です。

入江照雄氏は九州における洞窟研究の第一人者で、イリエマシラグモの他にもイリエの名をもつ洞窟性の生き物が数多く存在します。松橋収蔵庫には、イリエマシラグモをはじめ、入江照雄氏によって収集された貴重な標本が数多く収蔵されています。



\* 写真は入江照雄氏の著書「暗闇に生きる動物たち」より

収蔵庫収蔵品紹介 39

地学

不動岩礫岩

Fudoiwa conglomerate



不動岩礫岩（山鹿市首石） スケールは2cm

山鹿市の三玉地域では不動岩と呼ばれる赤紫色の突出した巨大な岩が見られます。この不動岩は「不動岩礫岩」と呼ばれる厚い赤紫色の礫岩層の一部が奇岩となって突出しているものです。不動岩礫岩は山鹿市三玉地域の不動岩周辺の外に、不動岩から西方の首石岩周辺、東方の湯口池周辺に分布しています。不動岩礫岩中の礫は、円礫、垂円礫と呼ばれる丸みを帯びた形をしており、大きさは大小様々で、50cm以上になるものもありま

す。礫の種類は変成岩の仲間の変はんれい岩・結晶片岩が多く、わずかに花崗岩が入っています。不動岩礫岩からは化石が見つかっていないため、いつ頃できたかの詳細は不明ですが、中にわずかに含まれる花崗岩礫が今から約9500万年前白亜紀中期ごろに貫入した筒ヶ岳花崗岩と判断されること、礫岩中のれき種構成が約8500万年前の白亜紀後期にできた熊本層群に似ていると



不動岩と山鹿市三玉白亜紀後期にできたと考

ます。収蔵庫収蔵品紹介 40

歴史

『週刊少国民』



この資料は直江家所蔵品の一つで、太平洋戦争中に朝日新聞社から発行された児童向けのグラフ誌「週刊少国民」の昭和18年6月27日号です。

昭和17年（1942）5月17日に創刊された「週刊少国民」は、内務省の指導にそって編集され、当時の社会状況が色濃く反映されています。

この号の内容は、陸軍兵器学校の紹介写真や「週間の動き」と題した戦局の解説、「大空へ・初陣の日へ」と題した大津少年飛行兵学校の記事と生徒募集など、明らかに軍国主義的なものです。その方針は全紙面を通じており、一見戦争と関係がなさそうな科学記事も東大教授の解説による航空発動機のしくみであったりと、子ども達をも戦争へと駆り立てる意思が感じられます。

しかし一方で、竹製防空兜の発明や金属供出した鐘の代わりに石盤を叩いている寺の紹介など、小さな記事ですが、物資不足が深刻になって国民生活が崩壊していく様子も読み取れます。

勇ましい記事と現実が、次第にかけ離れていくことを当時の子ども達は思ったのでしょうか。このような資料をもとに振り返り、考えてみるのは大事なことです。

この「週刊少国民」は、途中判型を変えつつも戦後まで存続し、昭和21年（1946）10月1日号より「こども朝日」に改称しました。



平成20年度 第3回 企画展示  
化石が伝える大地の成り立ち

開催期間：平成21年3月20日（金）

～5月1日（金）

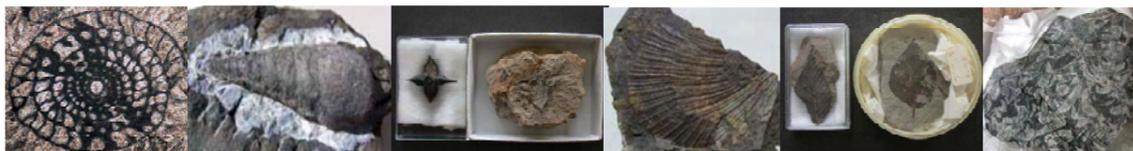
場所：松橋収蔵庫（旧松橋運転免許試験場）

時間：午前10時30分～午後4時30分

（3/21土、3/22日以外の土日祝は原則休館）



化石とは、地層の中に残された生き物の記録で、地層がいつ・どこでできたかを教えてくれます。今回は、熊本の地層から見つかった化石を時代ごとに展示します。いろいろな時代の化石とそれからわかる大地の移り変わりを少し覗いてみませんか？



ミュージアムパートナーズさんに聞いてみました

熊本のお月見



松橋収蔵庫ではミュージアムパートナーズクラブの皆様には熊本のお月見に関するアンケートをお願いし、今回は26名の方がご協力下さいました。ありがとうございました。

2008年に実際にお月見をされたのはそのうちの7名でしたが、今年はしなかったけど以前はしていたという方の意見と合わせると、県内のお月見は月に豊作祈願、豊作感謝、家内安全、無病息災などを祈って行われ、お供え物にはススキ、饅頭、里芋もしくは唐芋というのが多いということが分かりました。また、県南にお住まいの方からは十五夜綱引、相撲の話が多く寄せられました。2008年に行われた十五夜綱引行事について詳しく報告して下さった方もいらっしゃいます。

現在、松橋収蔵庫では十五夜や十三夜、月待ちなど月に関する行事からわたしたちの暮らしと月との関わりを考える調査研究を行っています。今回のアンケート結果はそのための貴重な資料として活用させていただきます。



## 夏休みキッズミュージアム

松橋収蔵庫では夏休みにこども向けの体験教室を行います。自然や伝統文化歴史にふれたり、おもしろ実験などがあります。ふるってご参加ください。

時間 期日	13:00~14:30 受付12:00~	15:00~16:30 受付14:30~
7/18 (土)	絵巻物をえがこう(13:30~)	どんぐりクッキーづくり
	化石のレプリカをつくろう(13:30~)	石のペンダントづくり
草木染めにチャレンジ(13:30~)		
7/19 (日)	竹でっぽうをつくろう	木の実で遊ぼう
	縄文土器づくりに挑戦	江戸時代のサインを書いてみよう
昆虫採集・標本づくり		
7/20 (月)	化石のクリーニングをしてみよう	鉱物万華鏡をつくろう
	藍の葉模様のオリジナル団扇をつくろう	石臼できな粉をつくって団子を食べよう
	セミのぬげがらさがし	カタツムリをさがそう
7/25 (土)	葉脈標本をつくろう	水でっぽうをつくろう
	昆虫クラフト	土の中の生き物さがし
7/26 (日)	縄文土器づくりに挑戦	火おこしに挑戦
	草花遊びをしよう	空飛ぶ種を飛ばそう
	石のタイルクラフトに挑戦	泥団子をつくろう
竹の笛をつくろう		
8/1 (土)	【キッズおもしろ実験】(10:30~15:30)	
	ベンハムのこま、スライムをつくろう、紙のブーメランをとばそう おどるシャボン玉、手作り紙飛行機で記録に挑戦、人工イクラをつくろう	
8/2 (日)	【キッズおもしろ実験】(10:30~15:30)	
	針金でアメンボ、バルーンスライムをつくろう、紙コプターをとばそう ストロー笛であそぼう、空気砲であそぼう、バランスおもちゃをつくろう	



**開催期間**：7月18日(土)～8月28日(金)  
(ただし、8月8・9・15・16・22・23日は原則休館)  
**開催場所**：文化企画課松橋収蔵庫  
**開館時間**：10:00～16:30  
**展示解説**：7月18日(土)12:50～13:20

全国には多くの博物館があり、何十万点、もしくは何百万点もの標本が収蔵されています。これらの標本が日頃注目されることはほとんどありませんが、実はさまざまな分野で活躍しています。この企画展示では、松橋収蔵庫が保管する標本の一部を紹介し、標本から分かることや標本作りの楽しさ、標本収集の醍醐味などを感じていただけたらと思います。

熊本県地域振興部文化企画課  
**松橋収蔵庫**

〒869-0524  
熊本県宇城市松橋町豊福1695  
TEL 0964-34-3301  
FAX 0964-34-3302

定期購読できます  
最新号をメールでお届けします。ご希望の方はお名前を記入のうえ、文化企画課までメールでお送りください。(パソコンのみ)  
bunkakikaku@pref.kumamoto.lg.jp

「熊本の自然と文化 松橋収蔵庫だより」は熊本県ホームページからもご覧いただけます。

編集・発行  
熊本県地域振興部文化企画課  
熊本市水前寺6-18-1  
096-333-2155  
2009年6月30日

# 熊本の自然と文化

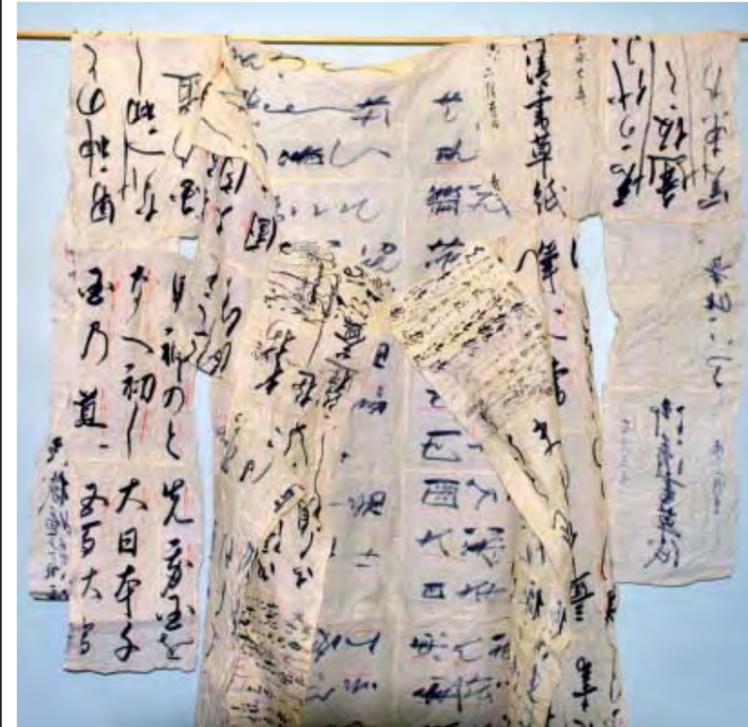
## 松橋収蔵庫だより

**No.8**  
VOL.3-1

松橋収蔵庫の収蔵品紹介や行事案内を始めて、3年目に入りました。今回は45品目からの紹介です。

### No.45 歴史

### きものじょうほごしほうせいひん 着物状反故紙縫製品



全体

今回ご紹介する資料は田口幸宗氏所蔵品の「着物状反故紙縫製品」です。手習いの反故紙(いらなくなった紙)などを縫い合わせて作られたもので、近世後期以降のものと考えられます。

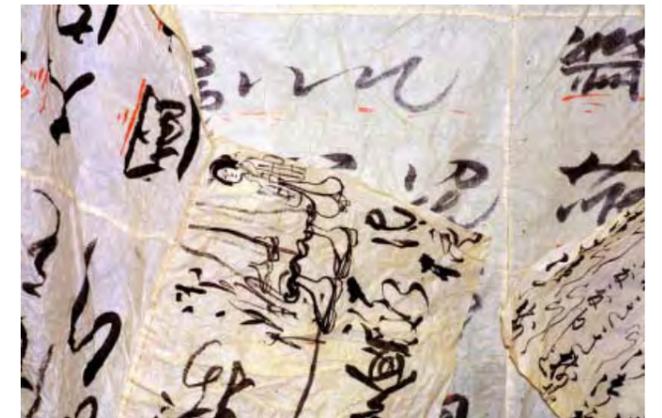
着物を保存するために包む「畳紙」として用いられたものなのか、「紙衣」(紙で作られた肌着、下着)として用いられたものか、この資料について詳しいことは残念ながら不明です。

使われている反故紙は「清書草紙」(寺子屋などで提出する練習の成果)などであると考えられます。朱色の筆は師匠役にあ

たる人物の添削であると思われます。

写真で拡大しているのは着物の右襟部分ですが、着物を着た女性が落書きされています。

この部分は「往来物」(平安後期から明治初期までひろく使用された初等教科書)を手本に何度も書く練習をした紙が使われています。懸命に練習しながらも、つい余白に絵を描いてしまったものなのかもしれません。左襟部分にも何かの模様が落書きされています。今と変わらぬ当時の「お勉強」の様子がうかがわれるようで、微笑ましく感じられる資料です。



着物右襟

No.46 植物

キタミソウ *Limosella aquatica* L. ゴマノハグサ科

キタミソウは、水辺の湿った場所（水湿地）に生えるゴマノハグサ科の多年草です。茎は細くて地面をはい、その所々に葉が集まってつきます。細長いスプーンのような形をした葉は長さ2～5cmくらいで、葉のわきから出る細い枝の先に直径1～2mmほどのとても小さな花が1つつきます。花弁は白色で先が5つにわかれた釣り鐘型をしています。北海道の北見で最初に見つかったため「北見草」といいます。北海道、埼玉県、熊本県に生育しています。写真の標本は、1995年に江津湖で採集されたもので、江津湖は九州で唯一の生育地です。



キタミソウは「改訂・熊本県の保護上重要な野生動植物 - レッドデータブック熊本2009」において、近い将来における野生での絶滅の可能性が高いとされる「絶滅危惧 B類」に選定されています。平野部にある水湿地は開発や河川改修といった人間活動の影響によって、水量の変化や水質の悪化、さらには水湿地そのものがなくなるという危機にさらされています。そのため、キタミソウをはじめとする水湿地に生きる多くの動植物が姿を消しつつあるのが現状です。

No.47 地学

ウミユリ *Crinoid*

古生代にできた石灰岩中にはよく「ウミユリ」と呼ばれる生き物の化石が見られます。名前から植物とよく勘違いされますが、ウミユリはウニやヒトデなどと同じ棘皮動物に属する生き物です。海底に付着するための“根”や、茎のような“柄”、花のような“冠”をもつ姿から、このような名前がつけました。ウミユリの仲間は古生代に出現し、古生代の中～後期(約4億2000万年～2億6000万年前)に浅海で大繁栄しました。しかし中生代以降は衰退し、現在ではほとんどの種が深海で細々と生活しています。そのため、現生のウミユリは、「生きている化石」と呼ばれています。

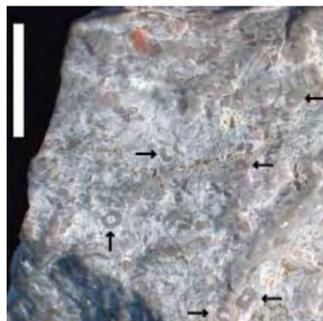
熊本県内でも、古生代にできた地層中の石灰岩からウミユリの化石はよく見つかります。ウミユリは多数の節から出来ているため死後バラバラに分かれやすく、日本からは完全な姿の化石はほとんど見つかりません。写真の標本は八代市坂本町の深水層(写真1)、上益城郡益城町の水越層(写真2)のウミユリ化石です。熊本で見つかるウミユリ化石の多くは柄の部分です。

[写真1] 深水の石灰岩中のウミユリ化石(濃い灰色のリング状部分); 柄の断面

[写真2] 水越層中のウミユリ化石(白色の棒状・リング状部分); 柄とその断面

写真のスケール2cm

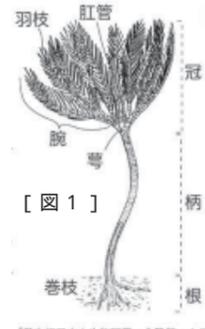
[図1] ウミユリの姿



[写真1]



[写真2]



[図1]

『学生版日本古生物図鑑：北隆館』より

No.48 民俗

たげた田下駄

田下駄は、湿田(深田ともいう)で泥に足を取られないよう歩いたり、苗代や田植え前の水田に肥料として草や枝を踏み入れたりするために履いていたものです。田下駄の歴史は長く、弥生時代の遺跡から見つかりました。わが国でおよそ二千年にわたり、ほとんど形を変えることなく使われ続けていた道具です。

写真の田下駄は、阿蘇町三久保(現阿蘇市)にあった千町無田と呼ばれる湿田で、昭和30年頃まで使われていたものです。大きさは縦約23cm、横約17cmで、使っていた方が自作したものです。軽くて水に強い杉材が用いられ、鼻緒も水に強いシュロが使われています。

千町無田や吉無田高原のように、地名に付くムタという言葉は湿地を指すといわれています。このような場所に作られた田には腰までつかるものもありました。しかし、昭和20年代後半から土地改良がすすみ、県内の湿田はほとんどなくなったため、田下駄も使われなくなりました。



No.49 生物

トビズムカデ(鳶頭百足) *Scolopendra subspinipes mutilans* 節足動物門オオムカデ属



2009.4.15 (松橋町)



頭部腹面(矢印の部分が顎肢)

トビズムカデは、その名の通り鳶色(赤みを帯びた茶色)の頭が特徴の大型のムカデで、北海道南部から沖縄県まで生息しています。体長は大きいもので約15cm、稀に20cmを超えるものもあり、日本産ムカデ類中では最大です。写真の標本は、松橋収蔵庫付近の雑木林で採集された雌(体長約12cm)で、やや大型の個体です。

ムカデは顎にある毒牙(顎肢)で咬みつき獲物を捕らえますが、これは足が変形したものです。この毒にはヒスタミンという発痛物質が含まれているため、咬まれると赤い腫れを伴った激痛が生じます。なかでもオオムカデ属の持つ毒は強力で、小動物を死に至らしめるほどの威力があります。

また、ムカデはあの長い体と多くの足(歩肢)も特徴です。その体は多くの節に分かれており、各節には一対ずつの歩肢(歩肢対)があることが分かります。漢字ではその外見から「百足」と書かれますが、実は百本足のムカデは現在まで確認されていません。不思議なことに、確認されたムカデの歩肢対は全て奇数だそうです。ちなみに、このトビズムカデも歩肢対数は21(歩肢は42本)であり、百本足にはほど遠いのです。



火おこし体験

~キッズミュージアムレポート~

たくさんのご来場ありがとうございました!

松橋収蔵庫では、7月18日(土)から3週末連続、計7日間にわたって「夏休みキッズミュージアム」を実施しました。そのうち5日間は、植物・動物・地質・民俗・歴史の各プログラムに分かれて、舞切式器具を使った火おこし体験や化石のレプリカづくり、竹でっぽうづくりなどに子どもたちが挑戦しました。

最後の2日間は、「キッズおもしろ実験」と称して、PVA糊を使ったスライムづくりや人工イクラづくりを体験し、自分で作った紙飛行機や紙ブーメランでさっそく遊んでいる場面が見られました。

今年のキッズミュージアムは延べ453名の参加があり、子どもたちが楽しく遊びながら、自然や伝統文化、歴史などを体験する良い機会になったようです。



スライムづくり

平成21年度 文化企画課松橋収蔵庫第2回企画展

ちょっと昔の暮らし探検 II

期間 平成21年9月7日(月)~11月30日(月)  
[土曜日、日曜日、祝日は休み]  
時間 10時30分~16時30分  
場所 文化企画課松橋収蔵庫(宇城市松橋町豊福1695)



昭和30年代後半から40年代にかけての高度経済成長の下、機械化、電化、プラスチックなどの化学製品の普及により、日本人の暮らしは激変しました。このように短期間で日々の暮らしが変化するという事は、これまで日本人が経験したことがないものでした。

今回の展示では水道、電化製品、ガス製品が普及する以前の暮らしの道具、機械化が進む以前の農機具、漁具などを中心に約200点の昔の道具を展示します。

ちょっと昔ではあたりまえの暮らし、でも今の子どもたちには想像もできない暮らしの様子を紹介します。大人も子どもも一緒に楽しんでいただければ幸いです。



熊本県地域振興部文化企画課

松橋収蔵庫

定期購読できます

〒869-0524  
熊本県宇城市松橋町豊福1695  
TEL 0964-34-3301  
FAX 0964-34-3302

最新号をメールでお届けします。ご希望の方は、お名前をご記入のうえ、下記アドレスまでメールをお送りください(パソコンのみ)。  
bunkakikaku@pref.kumamoto.lg.jp

紙へリサイクル可(大豆油インキを使用しています)

編集・発行  
熊本県地域振興部文化企画課  
熊本市水前寺6-18-1  
096-333-2155  
2009年9月15日

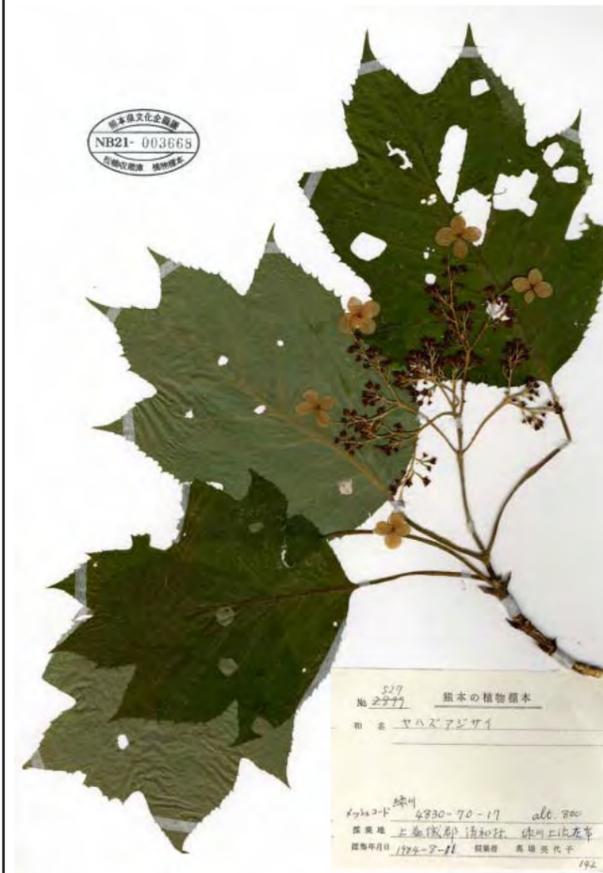
熊本の自然と文化  
松橋収蔵庫だより

No.9  
VOL.3-2

松橋収蔵庫の収蔵品の紹介とお知らせです。今回は50品目からの紹介です。

No.50  
植物

ヤハズアジサイ *Hydrangea sikokiana* Maxim. ユキノシタ科



ヤハズアジサイはユキノシタ科に属するアジサイの仲間で、深い山の林内に生育しています。葉先(葉の先端)が2つにさけた形を矢筈(矢のはしにある弓のげんをかける)に見立てた名前です。若い葉は全体が白く短い毛におおわれており、柔らかい手ざわりです。花は小さく、枝の先にたくさん集まって花序を形成します。花のいくつかは、がく片が花弁のように大きくなり、虫を呼び寄せる装飾花となっています。

ヤハズアジサイは植物地理学で「襲速紀」とよばれる地域に分布する日本固有種です。「襲速紀」とは、熊襲(南九州の古名)の「襲」、九州-四国間の海峡である速吸の瀬戸(豊予海峡)の「速」、紀伊の国(和歌山県)の「紀」の3文字を続けた言葉で、九州山地、四国山地、および紀伊山地を中心とした西日本の太平洋側の地域をさしています。

この地域に分布する日本固有の植物の多くは襲速紀要素とよばれ、かつては東アジ

アの広い範囲に分布していた種が気候変動などで襲速紀地域に取り残され、そこで独自に進化したものと考えられています。

写真の標本は1984年に上益城郡清和村(現山都町)で採集されたものです。松橋収蔵庫には、阿蘇郡久木野村(現南阿蘇村)、下益城郡中央町(現美里町)、および八代郡の東陽村(現八代市東陽町)と泉村(現八代市泉町)で採集された標本も収蔵されています。これらの標本は、熊本県や日本の植物相の成り立ちを調べる際に、貴重な資料となるものです。



「熊本の自然と文化 松橋収蔵庫だより」は熊本県ホームページからもご覧いただけます。

No.51 動物 **台湾リス** *Callosciurus erythraeus taiwanensis* ネズミ目リス科

台湾リスは、東南アジアに広く分布するクリハラリス (*Callosciurus erythraeus*) の台湾固有の亜種です。クリハラリスの名は腹部の毛が赤褐色 (栗色) であることに由来しますが、台湾リスの場合は灰褐色であるところが異なります。

台湾リスは日本各地の動物園などで飼育されていましたが、飼育小屋が壊れるなどして一部が逃げ出して繁殖し、各地で農作物を食害したり家屋や電線などに被害を与えたりするようになりました。また、在来のニホンリスと競合するなど生態系にも影響を及ぼすようにもなりました。そのため、2005年に制定された外来生物法により特定外来生物に指定され、飼育が禁止になりました。全国各地で駆除対策や餌付け禁止が呼びかけられるなか、宇城市三角町でも2009年5月より(独)森林総合研究所九州支所による学術捕獲が始められました。

写真の剥製は、2009年3月に宇城市三角町波多にて事故死したメスで、熊本西高校生物部顧問の天野守哉教諭より提供されたものです。



台湾リス  
(2009年3月 宇城市三角町)

No.52 民俗 **唐竿**

唐竿は、穀物や豆類の脱粒・脱穀を行う道具です。長い柄を持って打つと、先につけた棒が回転して対象を強打します。うまく調子をとらないと自分の体やほかの人の竿にぶつかったりと、コツがいったようです。

唐竿は中国やアジア各地、ヨーロッパなど広く使われていました。我が国でも古くから使われていたことが古代の文献からわかっています。

唐竿は全国的にはフリウチ、クルリボウ、フリボウ、パイなどさまざまな名前ではばれています。熊本県では県北から中部ではブリコ、宇城・八代地方でビャー、球磨地方でプリビャー、鹿児島県や宮崎県との県境付近でメグイボウなどと呼ばれます。

回転する棒の素材や本数はさまざまで、丸太や角材が1本のものや、杉・檜・椿などの若木や細竹・割竹を数本組んだものなどもあります。比較的簡単に作ることができるので、その時その場所で手に入る材料で工夫をこらして作っていたのでしょう。

写真の唐竿は、昭和初期に阿蘇郡蘇陽町馬見原(現上益城郡山都町馬見原)で使われていたもので、メグリボウと呼ばれていました。柄は1m80cmほどの竹です。回転部分は4本の枝を二つに折り曲げて軸に取り付け、かづらでしっかりと固定しています。



No.53 地学 **阿蘇外輪山の角閃石と普通輝石**

角閃石(hornblende)と普通輝石(augite)は、岩石を構成する主要鉱物です。阿蘇郡西原村と南阿蘇村の境界付近では、風化した火山岩から離れた角閃石や普通輝石の結晶を見つけることができます。これらは火山岩中のもものとしては大きく、結晶の形もきれいなため、優良な角閃石、普通輝石の標本として書籍などで取り上げられています。

角閃石(写真1)は外輪山の護王峠から依山に向かう途中で採集されたものです。依山を構成する角閃石輝石安山岩に含まれていたもので、結晶の形は長い柱状で断面は六角形をしています。

普通輝石(写真2)は冠ヶ岳北方の本谷越付近で見つかったものです。外輪山の内壁をつくっている輝石安山岩の中のもので、結晶の形は短い柱状で断面は八角形をしています。普通輝石には単一の結晶からなる単晶の他に、いくつかの結晶からなる複雑な形のものがあり、角閃石と比べると見た目がずんぐりとしています。

写真1 角閃石 産地:阿蘇郡南阿蘇村護王峠  
写真2 普通輝石 産地:阿蘇郡南阿蘇村本谷越  
スケールは2cm

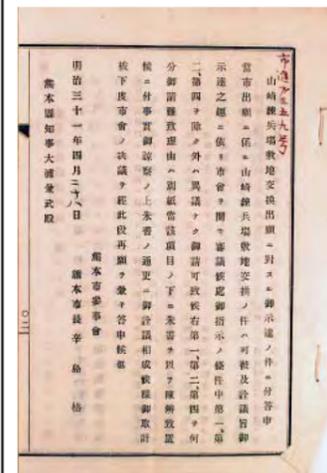


写真1



写真2

No.54 歴史 **山崎練兵場移転関係資料**



表紙

辛島家は近世期において藩校時習館の教授を輩出した家です。同家第12代目の辛島格は明治30年(1897)から3期にわたって熊本市長を務めました。この資料は辛島市政時代に行われた、山崎練兵場移転に関する資料(「山崎練兵場敷地交換出願二対スル御示達ノ件ニ付答申」)です。

明治期の熊本は軍都として市街地にも広大な軍用地が存在していましたが、これらは経済発展の妨げとなっていました。特に山崎町一帯の陸軍練兵場は当時商業の中心地であった古町と坪井町を分断しており、練兵場移転の意見が早くからありました。これにより、当時熊本市長であった辛島格は意見をまとめ、練兵場移転・敷地交換について陸軍との交渉を開始したのです。

この資料では、最初の出願後、陸軍側から提示された条件について答申しています。数度の交渉の結果、練兵場敷地は大江村と交換されることになりました。こうした辛島市長の業績を顕彰して、練兵場跡地に建設された新市街の一部に「辛島町」の名がつけられました。



附地図

### フィールドミュージアム " 中秋の名月を見よう、写そう "



10月3日(土)城南町の熊本県民天文台で、約60名の参加がありました。当日は快晴に恵まれ、とても美しい「中秋の名月」の姿を楽しむことができました。



日本の月観測衛星「かぐや」から送られてくる月面のハイビジョン映像には驚かされましたが、県民天文台の大型望遠鏡で見る月面の様子もそれに匹敵する鮮やかさで、月のクレーターなど地形の細部の様子には、つい見入ってしまいました。また、県民天文台のスタッフからプロジェクターを使って月についての詳しい解説を聞いたり、望遠鏡がとらえた月を持参のデジタルカメラや携帯電話のカメラで撮影することもできました。

今年度のフィールドミュージアムの天体観測会は、今回で終わりましたが、県民天文台では天気が良ければ毎週末の夜に星空を楽しむことができます。寒くなりますが、冬の澄んだ星空の散歩にでかけてみませんか？



下記までお問い合わせください。

熊本県民天文台 城南町塚原2016 塚原古墳公園内 電話：0964-28-6060

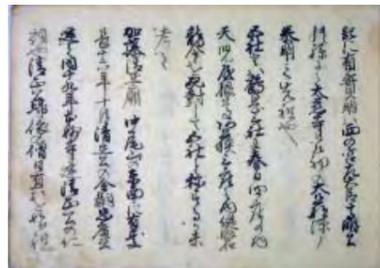
### 古文書講座報告



講座風景

松橋収蔵庫では、毎月第2土曜日に「古文書読み解き講座」を実施しています。講師に松本寿三郎元熊本大学教授を迎え、県内各地から参加した約40名の受講生が、松橋収蔵庫が所蔵する古文書を中心とする熊本の近世史に関する古文書の読み解きに挑戦しています。

これまでに、「質地証文」のような一紙物の比較的読みやすい古文書から「肥後名勝略記」(写真右)のような著名な文書まで、さまざまな内容の



肥後名勝略記

古文書を取り上げています。

また、熊本近世史の大家である松本先生の豊富な知識に基づいた、熊本藩の政治機構や地方行政、当時の生活や習俗といった幅広い内容の解説、軽快なトークも受講生から高い評価を受けています。

3月までの残りの講座も、楽しみながら学んでいただけたらと思います。



熊本県地域振興部文化企画課

### 松橋収蔵庫

定期購読できます

〒869-0524  
熊本県宇城市松橋町豊福1695  
TEL 0964-34-3301  
FAX 0964-34-3302

最新号をメールでお届けします。ご希望の方は、お名前をご記入のうえ、下記アドレスまでメールをお送りください。(パソコンのみ)  
bunkakikaku@pref.kumamoto.lg.jp

紙ヘリサイクル可(大豆油インキを使用しています)

編集・発行  
熊本県地域振興部文化企画課  
熊本市水前寺6-18-1  
096-333-2155  
2009年12月15日

## 熊本の自然と文化

松橋収蔵庫だより

No.10  
VOL.3-3

松橋収蔵庫だよりも10号を発行することになりました。今回は55品目からの紹介です。

### No.55 地学 天草の熱水変質を受けた珪長岩質の火成岩(天草陶石、天草砥石)



写真1 天草陶石：天草市天草町皿山



写真2 天草砥石(木目石)：上天草市大矢野町江樋戸

写真の標本は天草市天草町の皿山で採取された天草陶石と、上天草市大矢野町の江樋戸で採取された天草砥石(木目石)です。天草陶石は、着色不純物が非常に少ない、焼成時の変形が少ないなど、陶磁器の原料として高い評価を受けています。一方、天草砥石は上質の砥石として有名です。この縞模様が木目のように見えることから、「木目石」という石材としても用いられています。

この天草陶石と天草砥石は地質学的には同じ岩石です。これらがどのような岩石かというと、もともとの岩石は、小さな石英と長石の結晶が集まってできた岩石(石英斑岩、珪長岩)です。石英と長石成分に富んだ珪長岩質のマグマが白亜紀~古第三紀始新世の地層に貫入(マグマなどが他の岩石、地層を貫いて入り込むこと)してできました。今から約1300万年前の新第三紀中新世のころに貫入したとされています。これらの岩石は地層に貫入した直後、鉄の成分を多く含む熱水によって長石などが、粘土を構成する鉱物である粘土鉱物に変わる変質を受け、現在見られるような岩石になったと考えられています。

このような熱水による変質を受けた珪長岩質の貫入岩は、宇土半島先端から、天草大矢野島、上島、下島の天草各地で認められています。特に天草下島西部では10m以上の岩脈(地層に垂直に近い板状に貫入した貫入岩体)がいくつも確認されています。天草では、そのなかでよく変質し白~白灰色になった部分が陶石、陶石より変質の度合いが低く酸化鉄が残り、白色~淡い褐色地に強い褐色の縞模様が残った部分が砥石として扱われています。



天草陶石を使った陶磁器

「熊本の自然と文化 松橋収蔵庫だより」は熊本県ホームページからもご覧いただけます。

No.56 民俗 ちぢりす ちぢりす



ちぢりすとはちぢりすを玄米にすることです。県内ではちぢりすのことをトウス、トウスなどとよぶことが多いようです。ちぢりすには丸太を用いた木臼と、竹籠や木桶に塩を加えた土を入れて固めて作った土臼があります。木臼の方が古く、平安時代にはすでに使われていたことが分かっています。一方、土臼が登場するのは江戸時代中期で、材料の入手や製作が簡単なので、木臼に代わって広く使われるようになりました。

写真のちぢりすはどちらも阿蘇市一の宮町で使われていたものです。木臼は木臼でモミスリウスと呼ばれていました。直径70cm、高さ65cmほどで、樹齢80年以上の松で作られています。土臼は土臼でツチトウスとよばれていました。大正初期に木臼に代わって使われるようになりました。直径68cm、高さ60cmほどで、上下の臼の接する面に多数の木片を埋め込んだ歯がついています。大きく重いちぢりすは数人がかりで回さなくてはならないため、ちぢりすは数軒で組を作って、数日かけて行っていたそうです。

No.57 植物 へご Cyathea spinulosa Wall. ex Hook. へご科

へごはへご科に属する大型のシダで、茎は樹木のように立ち上がり、高さ4mに達することもあります。このようなシダを木生シダといひます。葉は細かく切れ込んでおり、長さは1~2mにもなります。茎の上の方に何枚もの葉がつき、放射状に広がります。木生シダの仲間には古生代石炭紀(約3億年前)に最もよく繁栄し、大森林を作っていたと考えられています。

へごは亜熱帯性の植物で屋久島、種子島以南に多く生育し、九州南部や長崎県五島などにも生育していることが知られています。熊本県での自生の確認は、1959年の水俣市におけるものです。1965年8月25日には天草郡河浦町(現天草市河浦町)でも確認されました。



河浦町のへご自生地は多くのへごが林立する群生地であり、1969年に県指定天然記念物に指定されました。

写真の標本は、河浦町のへご自生地の発見時に採集されたものの一つと考えられます。新たな分布記録の証拠として重要な標本です。



No.58 動物 ソウシチョウ Leiothrix lutea (スズメ目チメドリ科)

ソウシチョウは体長約14cmで、赤い嘴を持ち、体は全体的に緑色で胸は濃いオレンジ色、翼に黄色と赤色の斑紋がある鮮やかな鳥です。木の下にササ類を含む藪の茂った広葉樹林などを好み、大きく高い声でさえずります。雌雄で外見に差はあまり見られません。写真の剥製は、熊本県葦北郡にて事故死した雄の個体です。

現在では本州の一部や九州各地で見られるソウシチョウですが、本来の生息地はインド北部や中国南部などで、もともと日本には生息していなかった外来種です。日本での生息は、飼育個体が逃げ出したのが主な原因と考えられており、九州では1980年ごろから標高の高い九州中央山地で生息が確認されるようになりました。



近年、ソウシチョウは環境への適応力の高さと旺盛な繁殖力のために山地から低地へと生息範囲を拡大させてきています。繁殖環境を同じくするウグイスの繁殖成功率低下を招くなど生態系への影響が懸念されるため、2005年に特定外来生物に指定されました。

No.59 歴史 陣笠 (米村家資料)

今年度、熊本市の米村昭洋氏より「九曜紋付陣笠」・「米村家紋付陣笠」など、多くの資料が寄贈されました。

陣笠の起源は古代・中世までさかのぼりますが、一般に陣笠とよばれるものは戦国時代、主に雑兵たちに使用された笠のことです。薄い鉄、または革で作られ、漆を塗って兜の代用とされました。江戸時代には身分によって表面の塗り色および裏地などが定められていました。

上の写真の陣笠は正面に細川家の紋である九曜紋を付け、表・裏ともに黒塗りとなっています。下の写真の陣笠は米村家の家紋を付けた、黒塗りのものとなっています。近世期において小島町は海産物などの物資集散を通して発展した町であり、米村家は同地で藩内外との交易を行っていた廻船商人でした。また、米村家宅の近くには抜荷(密貿易)などを監視する「小島川口番所」が設置されており、おそらくはこうした事情によってこれらの陣笠が米村家に伝承したものと考えられます。



九曜紋付陣笠



米村家紋付陣笠